



言語における創造性：言語理論の一試論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 葛西, 清蔵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001609

言語に於ける創造性

— 言語理論の一試論 —

葛 西 清 蔵

北海道教育大学函館分校英語学研究室

Seizo KASAI. Creativity in Language

— A Preliminary Essay in Linguistic Theory —

内 容

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ◦ Chomsky における創造性, Descartes, Humboldt ◦ 心理学的な創造性 | <ul style="list-style-type: none"> ◦ 生得的な言語能力とその論理性 ◦ 統一科学の一分野としての性格, 弁証法 ◦ 結論 |
|--|---|

0. 各分野にわたって、近来、創造性は極めて重要な役割を果しているとはきくところであるが、英語学に於いても例外でなく、Chomsky の考えを一つの境にして、従来の英語学から大きくその研究の姿をかえることになった。本稿に於いては、文法の中で創造性とは一体どう考えるべきなのか、又これを中心にして普遍的なものとしての文法は一般にどういうところにその体系をたてることが出来るものか考えてみたい。

1. 「創造する」にあたる 'create' の意味は C. O. D. の規定するところに依ると、bring into existence とされており、bring birth to, *generate* と規定される 'produce' と部分的には一致するところをもつものである。現に produce ないしは production, productive は極めて度々変形成文法に見られる用語であるし、creativity をもとにした文法が generative grammar とよばれていることもその一端を示していると言える。

2. もし仮りに今、create を produce ほどの意味に解釈するとすれば、これは何も新しいものでもないものであって、いわゆる英語教育の目標である、読み、書き、話すの、後者二つがそれにあたるものである。例えば Fries の、...mastering of the sound system of the language, that is, being able to understand the stream of speech sound and achieve an understandable production of it¹⁾ に見られる production もそれにあたるものである。

3. 然し文法プロパーの中で、与えられた資料に限られた observatory adequacy を満足させる様なものとしてではなく、それ以上の文法的な文をつくり出すものとしての創造性、生産性、言語能力というものが問題とされるようになったのは最近と言わなければならない。従来の言語の定義には、言語は恣意的な記号の体系である、というのが一般的であったが、近来急激にこれに creativi, productivity を加えるものが多くなった様に見受けられる。E. H. Lenneberg は、

productivityこそ言語の一般的性格である²⁾といい、J. J. Carrol は新しい発話を生み、理解する能力こそ言語の本質 (essence) であり、テキストの例だけを基礎にして言語構造を記述しようとするなどには不十分である³⁾と言っている。

4. この創造性、ないしはその能力に関して、これらは心理学と密接な関連をもつものであり、従来の言語学とはまるで対立的に、言語学の心理学に対する結びつきが強調される様になったのは当然である。Katz が言語能力の理論は言語行為がどの様にして生み出されるかを記述する、より広い意味での心理学理論の一分野になった⁴⁾、とか、言語行為の理論は straightforward な心理学理論となろう⁵⁾と言っている通りであろう。Chomsky 自身、創造性とその能力に関して、心理学を非常に重視しているものであり、彼の言うところに従うと文法に至る方法に関する問題とは、言語学プロパーに関するよりは、むしろ、案出(invention)の心理学に属するものである⁶⁾、と考えているのである。言語研究の態度の厳密さを求めて、主観的なものは学問的でないと、はっきり心理主義的な考えに別れを告げた言語学は、ここで再び、創造性を中心にして大きく心理学的性格を帯びることになった。

5. かく脚光をあびることになった創造性とは一体どういうものなのか、まず Chomsky の場合をとりあげ、それを後づけながら考えてみたい。然る後に、それをふまえて創造性に関する考えを明らかにし、かつそれを中心に、従来相容れないとされている心理と論理の接点を探り出してみたい。

6. 大体、Chomsky の考え方が Harris の理論をその根の一つにもっており、それを発展させていったものであることは誰でも知るところである。現に変形等については、Harris の中には非常に類似したものが見れるのであって、Chomsky の理論が生まれ出る必然性を読みとることが出来る。それについては Harris の一連の著書からも具体的に知ることが出来るが、例えば、類似した、あるいは近くの文とかく比較することによって、すべての文構造はいくらかの単文構造のくみ合せ、或いは変形されたものである、ということを表わす根拠を与える⁷⁾、というところからもその一面が推測出来る。言語理論をデータの summary としか見ない observatory adequacy に終るもの⁸⁾とし、Harris はもっぱらその構造、手続き的なことに触れてるのに対し Chomsky はこれに人間固有の言語能力、生産性を結びつけたのである。彼はこの言語能力こそ最も重要なものであるとして、A grammar is an account of competence.⁹⁾ と言い切ったのであった。ここに人間共通な言語能力を基礎にして、かつ単純な文から、組み合わせ、変形によって新しい文をつくりあげ、発話とするという彼固有の文法理論が出来上ったのであると考えて間違いないであらまい。

7. Chomsky が人間共通のこの生産的な能力に関して、その哲学的な根拠を大きく Descartes と Humboldt に求めていることは彼のどの著書からでも知れるところであって、特に Descartes に関しては Cartesian Linguistics なる一著をあらわしてその論拠を説いている通りである。その中に引用され、言及される学者、後に明らかになる様な学問的な性格からしても、neo-medieval philosopher とよばれたりすることも故ないことではないであろう。

8. まず Descartes の著書について、Chomsky がその根拠としたと思われる個所を探ってみることにしたい。

Descartes がその著書の中で、言語について言及しているところはいくつかあるが、その中でも強力に基礎にとりあげられたのは Discours de la methode (方法序説) の次の個所であろう。ここで Descartes は人間に特徴的な能力について、機械と比較することによって、両者の二つの

差異点をあげて次の様にのべている。

…de le premier est que jamais elles ne pourraient user de paroles, ni d'autres signes en les composant, comme nous faisons pour declarer aux autres nos pensées……Et le second……elles n'agiraient pas par connaissance, mais seulement par la disposition de leurs organes: car au lieu que la raison est un instrument universel…il n'y a point d'hommes si hébétés et si stupides…qu'ils ne soient capables d'arranger ensemble diverses paroles, d'en composer un discours par lequel ils fassent entendre leurs pensées…¹⁰⁾

つまり一つには機械には自分の考えを表わす言葉がないことであり、二つめには、万能の道具である理性が欠けている、と言うのである。特にそのあとの、色々な言葉をくみ合わせることによって、自分の考えを相手に解らせ得ないほど鈍重で愚味な人間は一人も居ないという個所は、人間共通の言語能力をうち出す根拠としては極めて有力なものである。(たしかに、この理性が強調的に主張されたが、機械とは区別されるものとしての人間の理性が、合理性という形で主張されることになり、一方では後に「人間機械論」などという現われ方をするのは皮肉なことである)。Descartes は知る様に、二元論であるが、肉体、精神を変形文法の phonological component, semantic component 又は surface structure, deep structure¹¹⁾ にあてはめることの正当性はさておいても、Chomsky の Descartes 理解が、上述したような理由で、人間は機械とは違うものであるという程度のものであったことは、彼自身が、人間だけが単なるオートマティズムとは違うものだという Descartes の考え方¹²⁾、という言い方をしているところからも明らかである。科学的に厳密であろうとしたことが結局、言語学の人間不在を訴えられる様になったが、ここで機械にはない理性的なものを、人間の本質としてとりあげ、その共通な生得的な能力に関連して心理を重視したことによって、言語学に人間を取りもどすことが出来たということはあるいは言えるかも知れない。

9. さて、Chomsky は Descartes の言うこの言葉を組み合わせて自分の考えるところを理解させようという能力について、これがどの様に動的に働くかについては別に求めなければならないとする。(Saussure の langue, parole を二元論に単純にあてはめることの不適当なことは、Saussure の、この照合は適当ではない¹³⁾、と言うところからも明らかであるが)、langue の様な単なる項目の inventory ではなく、生成の過程の一組織として、底に潜む能力という Humboldt の考え方にかえらなければいけない¹⁴⁾、と Chomsky 自ら語っているところからも活動性については Humboldt に求めていることを知れる。

当の Humboldt の言うところによると、言語は人間の内部的なもの、直接的に精神の発露¹⁵⁾ の一つの型(これを Form とした)であって、一見そうは見えても言語は教えられるものでもなく、むしろ心情の中に喚起されるものにすぎないものであるとされる。言語の生産ということは人間の内的欲求である¹⁶⁾、という彼の言葉は言語を出来上った、死んだ産物(ein todtes Erzeugtes)としてよりは、むしろ生産活動(eine Erzeugung)と見られているのも又当然のことである。即ち言語は所産物(ergon)ではなくて、活動性(energeia)¹⁷⁾と規定されていたのである。

ここではじめて Descartes の言う人間に生得的な言語能力と Humboldt の活動性が結びつけられたのであった。然しながら、やや深く本質を探って見ると、Humboldt の考え方が本質的に Descartes の考えと相容れる性質のものではないことが明らかになる。つまり、Humboldt は人間の内的なもの一つの発露として言語を見、その表われ方を型として、言語の違い、文化の違い

いをこの型の違いとしたのである。即ち彼にとって文化は非常に密接な関連を言語に対してもつものであり、性格的には、言語と文化のつながりを強調的に理論化してうち出した Sapir-Whorf に近いものであることが想像つくであろう。この Humboldt と Sapir-Whorf 三者がいかに深いつながりをもつものであるかは既に R. L. Brown¹⁸⁾ によって明らかにされている。ここではむしろ共通性が個性よりもより軽視される形になっているわけであって uninstrument universel としての理性を重視する Descartes とはいつか同行出来ない性質のものなのである。Chomsky 自身もこのことは認識していたのであって、これは動物的なものとしてよりも、思考、自己表現の方法として見る限りにおいては、たしかに Humboldt は Descartes の枠に入ることは入る¹⁹⁾、とか、心的過程におけるこの様な役割を個人の言語に帰したという点においては、Humboldt は Descartes 的言語学から根本的に離れる²⁰⁾、という彼自身の言葉からも知ることが出来るのである。

いずれにしても、Descartes と Humboldt の考え方は Chomsky の文法論に根拠を与えるために関連づけられることがあるとしても、これはあくまで便宜的と限定さるべきであって、既に見たように本質的には相容れるものではないことが知れる。自らも「フンボルト」という一著をあらわしている泉井は、彼 (Chomsky) による Humboldt の受取り方は片面的であって……、デカルトとフンボルトは思想的に元来背馳的なものである²¹⁾、という言葉でこのことを述べているところからもその一端を知ることが出来る。ある意味では、Chomsky は Descartes を強引に我田引水した²²⁾、と言われても仕方がないであろう。

10. このようにして、便宜的にはあれ、その普遍性、抽象性と共に彼の文法理論の強力な論拠である創造性は上述のようにしてその根拠を裏付けられることになったのであった。然しながら、 $\{X|D_x\}$ (E. Bach. An Introduction. p. 153) の D に、 $A \rightarrow CS/X-Y$, where XAY is analyzable as $Z_1 \dots Z_n$ (Aspects. p. 98) の $Z_1 \dots Z_n$ に、又変形の部門でその必要性は説かれ得ようが、果してこの創造性に関して、単なる抽象的なものとしてではなく、その本質は一体何であるのか、これが文法の中にどんな具体的な裏付けとなって入りこんでいく(べきか、ではなく)のかについては必ずしも明瞭な説明が与えられているとは思われない。むしろ他の分野においても同様であるが、ある程度理論というものは、最初仮説というかたちでうち出され、具体的な例によってその正当さが確認されるにつれて規則なり法則としての位置を獲得する性質のものである筈である。文法においても例外でないのは指摘されるまでもないが、これが単純性(簡潔性)、無矛盾性、抱括性(完全性)を目標に追求されていくわけであろう。そういう意味で Chomsky の理論が、ある程度仮説としてうち出されていることは当然であるが、Descartes, Humboldt に根拠を求め、理論をかためながら、なおかつその根拠と文法理論との、'べき'としてのつながり方ではなく、実際どうなって'いる'かのつながり方は上述した様に明確ではないと言ってよい。このことは彼自身の、いかにして創造的思考が可能であるかに関してはこれは全くの神秘である²³⁾、とか、生成の能力に関する問題は……全く未解決のままである²⁴⁾、と言う言葉の中にも、その創造性自体の正体の不明確をうかがうことが出来るであろう。

11. 以上われわれは Chomsky の場合について、その創造性についてかんたんにその依るところを明らかにして来たわけであるが、それによるとその根拠は Descartes の人間共通の生得的な言語能力と Humboldt の活動力、生産的な物の見方が、本質的には融合出来ないものではあるが、その基礎になっていることを知り、しかもなお、それについては、問題の余地のあることを知った。我々はここで再び創造性とは本質的に何か、又どういうつながり方を文法理論ともつのか、

という問題を発しなおし、考えてみなければいけない。

12. 既にのべた様に、理論はまず仮説として提出されるのは当然であり、かつ一応説として提出されるものには又それだけの根拠が必要なのは学問として言うまでもない。本稿では創造性そのものの性質上、まず心理学的な（とくに思考の）点からこの創造性の問題にふれていきたい。

まず、大前提としてあきらかにしなければならないのは、対象に対するとりくみ方の問題である。これは結論的には二つに分けることが出来る。即ちいま認識という問題を取りあげた場合われわれの認識は、多数の互いに独立な、しかもそれ以上細かく分けることの出来ない最小の要素から成りたっているとし、まずその最小の要素を論理的なもの（論理的原子と名づける）と考える。さらにこの論理的原子は一つの判断（いくつかの個物をあらわす言語を一つの述語で結合したもの）つまり「命題」のかたちを取るものとし、この「命題」がさまざまに結合することによって現実の複雑な認識が得られる²⁵⁾、と考えるのがその一つの方法である。これには、個々の感覚から得られた単純な観念がいくつか集って、複雑な複合観念なるものが出来上るという J. Locke の経験論にも似た一面を見ることが出来ると言えよう。（これについては別稿「一経験論者、ジョン・ロックの言語観」を参照されたい）。この様に一つの全体を部分の集合だとする考え方は極めて古いものであり、一名原子論（atomism）と言われ、分析的で、一般にアリストテレス的思考とよばれているものである。

このような部分の集合を全体と考える分析的原子論に対するものとしてあげられるのが次のべる非アリストテレス的思考である。これによると、全体（whole）というものは単に部分の集積なのではなくて、むしろ全体から部分が規定される様な性格をもつものであるとし、全体の優位を強く打ち出す考え方である。一名 wholism とよばれる。先のアリストテレス的思考によれば、全体としての性格は部分の集積の結果として自ら決定するものであるとするに対して、あくまで全体的又は関係中心的に見、部分を独立した要素としてではなく全体の結構によって、その位置、性質が規定されてゆくもの²⁶⁾、という立場に立つわけである。一般に物の性質を極めようとする場合に、それを各要素に分析することは古くからある素朴な考え方なわけであるが、単に要素に分析してみるばかりでなく、むしろその要素のつくり出す関係に注目して、全体をつくり出す様態を追求しようとするのは近代の科学的な考え方の特徴である。常識的に考えても多くの場合、（例えば時計でも）全体は単なる部分の集積ではないのであって、そこにプラス α として要素間の関係を加えなければいけない。言語についても全く同様のことが言えるのであって、要素の単なる集積が言語行為として通用するわけではない。その要素間の統合的な関係が重要である。言語学的実体があるとすれば、それは機能又は言語単位間の相互の関係の中に見出さるべき²⁷⁾、であると言う。言語の分類は多く要素とその関係の仕方に注目して行ったものだと思えて間違いない。従来の言語学に比較して、構造言語学はこの要素間の関係というものを極めて重要なものと見た言語観であると言える。関係というものは当然それをつくる要素を前提とし他の要素とその区別を予想するのである。言語には差異しかない²⁸⁾、とは Saussure の言葉であるが、音素、異音、示差的、など一連の用語が生まれ得るのもこの様なことがもたれているからに他ならない。

さて、非アリストテレス的な思考法が心理学に於いては、いわゆるゲシュタルト心理学に典型的に見られる。ここでは部分の認識は全体ないしは、他の部分との関係（バランスと言ってもよい）によってきまるのであって、生物体の環境と相互作用については、両者の間の「均衡」が一時的に破壊されたとき、その失われた「均衡」を回復するに適應してゆく働き²⁹⁾、と規定すると

ころこそ根本をなしている。即ちここでは心理的な作用は全体的な均衡を取りもどす過程としてとらえられている。思考とはまさに全体的なバランスがくずれたとき、それをバランスのとれたもとの状態にかえろうとする動きに他ならないとするわけである。心理学的ではこの均衡状態を homeostasis とよぶが、これを求める動きというものはあたかも我々が病気のとき、身体が常に回復すべく有機的に動くのとおなじであり、これが思考の場合、精神的なものであるという違いよりないとする。肉体的な均衡を乱すものが病いである如く、精神的には、それは広い意味での‘問題’（あくまで精神的な均衡を乱すものとして、従ってある人にとっては問題となり得てもある人にとっては全く問題として意識されない場合が当然あり得る）である。つまり思考とは、精神的な均衡を取りもどそうとする働き、広い意味の問題解決である。立場はどうあれ少なくともこの点に関する限り大方の定義は一致している。例えば、思考の一つの特徴は問題解決の過程であるということである。問題とは何らかの意味において生活体の行動または意識の円滑な進行を妨げる状態であり、この妨害をとり去り、または克服する過程が思考である³⁰⁾、などはまさにその典型的なものである。（従って、思考ということからは、いわゆるぼんやりした回想などは取りはずされてしまう。）

さてここで、見落してはならないのは、思考というものが、傷、病いが癒える様に自動的に均衡を取りもどす働きとしてとらえられていることである。これは事実反するのであって、問題解決として規定される思考は決して無意識的な、自動的なものではない。もっと意識的、主体的な（ある意味では努力を要する）ものである。ここにこそゲシュタルト心理学的な思考の考えが、条件と要求をまず相互に関係づけて考える主体の活動が無視されてしまっている³¹⁾、という点で決定的な欠陥を指摘されたのである。（無論ゲシュタルト心理学の完全な否定ではない。）ここではじめて問題解決にあたる主体性が重視されることになり、思考作用とは有意的な知的の課題解決過程³²⁾、であるということになったのであった。

13. さて現実の問題解決にあたっては、知識とか過去の経験がその重要な役割を果すことは明白であるが、この知識、経験が解決の資料としては一つの概念或いは言語（広い意味での）として情報となり提示されると考えてよからう。例えば、すべての人間の経験は概念的な scheme として提示される³³⁾、とか、人生経験は言語によって役を果す (serve) べきものであって、決してその反対ではない³⁴⁾、という言葉はこのことを裏付けるものと受けとることが出来よう。

かくして提示された資料に基づいて、それを分析したり、総合したり、比較したり、かつその結果を基礎にして、更にどうすれば最終的な問題解決に至れるかを推理しながら、いろいろな方法が試みられていくわけである。

14. ここで注目すべきことは、この問題解決の過程の一連の分析、総合、推理などというものは実は我々が概念を構成するプロセスと同等のものであることである。つまり、具体的に経験した個々の例から一つの問題を抽象し出すのと同様である。資料不足や観点が全般的はずれでない限り、そこから抽象される概念は同じものになる筈である。人間の認識が、その経験が夫々違うにも拘らず同じように成り立つのはそのためである。Descartes が理性というような生得観念によって認識しようとしたに対して、Locke が経験の重要性を主張して経験論をとるなかで、その根底に前提されていたのは、広い意味での、理性的なもの、抽象、概念化の能力だったのである。（これについては別稿、‘一経験論者、ジョン・ロックの言語観’を参照されたい）。いずれにしてもこの分析、総合、推理というものは人間生来の抽象能力、概念化の能力に基づくものであって、抽象された特性が新しく総合され、その結果生まれる抽象的な総合が思考の主たる道具

となったとき、一つ概念が生まれるのである³⁵⁾、と言われる通りであり、人間に共通な能力に基づくという意味では個人的なものではなく、かなりの客観性をもったものであって、それなりに論理的なものである。(この点に関してはあとで触れる)。今単純な例をあげるならば、例えば、一国語を知ってる人が、同じ様に他国語を学ぶことが出来る、ということがその大きな証明になる³⁶⁾。

15. 以上かなりながきにわたってのべて来た様に、“ある価値規準(ここでは均衡回復としての問題解決)を目標にして、一つの情報として概念のかたちでたくわえられている既得の知識、経験に基づき、それを分析し、総合し、更に推理することによって、新しい解決への方向を探り出していくこと、”これこそが、本当の意味における創造と名づけられるべきものである。これこそ‘creation’である。想像は創造の母体である³⁷⁾、とか、推理は創造的である³⁸⁾、という James の言葉はここに至ってはじめて正しく理解される性質のものであろう。加えて次の言葉などはこのことを最もよく言い表わしていると言えよう。即ち、ある課題に直面した人はその解決のために多くはまず再生的思考をして過去の経験や知識に解決法を求めるであろう。それで解決出来ないとき新しい方法を考え出さねばならない。つまり創造的思考をせねばならない。……まず仮説として想像を描き、その中に推理の筋道をたててみるであろう。そして仮説——検証をくり返しながらか次第に、もしくは突然に、新しい構造の思考が現われ、それが客観化されたとき、創造が行なわれたというであろう³⁹⁾、その条件は 1. 思考の方向が明瞭、2. 不合理でないこと、とは今まで屢々のべて来た創造の性格を示して余りあろう。問題解決という最終的な価値規準を無視してはならず新しい組合せをつくりあげたとしてもそれは決して創造的とは言えない。(語をいくら組み合せても非文法的なものは意味がない、と解してもよからう)。

然も既にのべたところからも想像出来るように、この過程こそ言語行為の課程なのである。すべての基礎になっていたものがまさに Descartes の言う人間共通の生来的な言語能力と同等のものである。Chomsky が Descartes の言語能力をもち出したのはここではじめて正当に理解されるものであろう。Chomsky が、言語習得のしくみは、問題解決や概念形成にも応用出来る知能の構造全体の一分野である。別の言葉で言えば、言語能力は心の働きの一つにすぎない(The language acquisition device is one component of the total system of intellectual structures that can be applied to problem-solving and concept formation; in other words, the faculté de langage is only one of the faculties of the mind.)⁴⁰⁾ という言葉の中にもこの間のことが充分に示されている。これで概念構成、問題解決、思考、問題解決のつながりが明瞭になる。

なお興味のあるのは、近頃ますます進んでいる脳の働きの研究の中で全く同じような結果が出ていることであろう。創造性と言葉の関係を示す一つのしめくくりの例としてあげよう。これによると、創造機能というものは決して脳の中に湧き出して来る不思議なものではない、のであって、どんな場合にも何も無いところから何も生まれてくることはないのだから、と言う。更に言うには、この様に考えると脳の中にあるものは、生まれつきのも、後天的に獲得したもの以外にはなにもないわけで、創造機能にしてもそれを材料にしてなされるとしか考えられない。しかもその材料がそのままであれば創造にならない。そこで考えられることは、その新しい組合せをつくることである。創造性は組合せであると言われるのも当然であろう。ところでその組合せであるが、具体的な対象物を組合せる場合もあるだろうし、言語をくみ合わせることもあるであろう⁴¹⁾、という言葉は創造性と言葉の関係を余すところなく説明するものであると言える。

16. 以上、創造性と次いでそれと言葉の関係について、大まかながら明らかに出来たと思う。次に（今までも少しふれて来たが）これらの根底にある共通な能力、今まで抽象力、概念化の能力ないしは理性、あるいは又言能力としてふれて来たものの性格をもう少し詳しく見ることによって、一層その本質を明確にしていきたい。

創造性、又これと言語の関係についても少し触れたが、言語における創造性とは上に述べた様な過程を経て文法的な文を生み出すことによって意図することを伝えるというその価値規準を達することではなければならない。先にのべた様に、言語は結局、要素とその関係（互は他を当然予想するものであるが）から成っていると見る事が出来るが、この場合、便宜上要素は語、関係は要素間の関係を表わす文法的な規則と言ってもよからう。言語は恣意的な記号の体系であることは今更言うまでもないが、記号論理学者たちは、記号とこれを使用する人間との関係を語用論、記号とそれがさし示す事物や事象との関係を意味論、一つの記号と他の記号との関係を構文論⁴²⁾、と定義づけている。まさに文法は記号と記号（言語において要素を代りに表わすものが記号であるから）との関係なのである。記号論理学に即して言うならば、この場合の言語の構文法（シンタックス）とは、いくつかの基本的な論理語（たとえば、「ない」、「かつ」、「または」、「ならば」などのような文章を論理的につなげる言葉）の使用規則を示すものにほかならない⁴³⁾、と言われる通りであろう。言語にあたるギリシャ語 *logos* が理性という意味をもつことは人の知るところであるが、これは合理性のある人間のみと言語があるという非常に象徴的な意味をもつ様に、これらの記号間の関係は極めて論理的なものである。（非常に抽象的な記号論理的なレベルに於いてである）。これを証明するのは、既に触れたが、ある国語を知ってる人が、他の国語を同じく学ぶことが出来る、という事実である。この根底に例の人間に共通な、生得的な能力が前提されない限りこの事実は説明出来ないものである。この能力こそ時に概念化の力、抽象力とよばれ、Descartes に於いては生得的な理性とよばれ、Chomsky が共通の言語能力としてその理論の根拠にすえたものだったのである。この能力が、極めて普遍的で客観性をもったものであること、そこに見られる論理的な性格についても少し触れて来たが、この論理性は純粋な論理学の方からも裏付けられる様になった。即ち、いかなる言語をとってみても、論理法則は概してすべてに適用する。したがって論理法則は一般に言語法則と言いかえてもよい。……この事実は人間が言語を使用するに至る過程に共通なある構造が存在したということを示すものと考えることが出来るかも知れない。……この意味で人間は先天的知識をもつという表現がかなり信憑性をもったものになる⁴⁴⁾、とか、記号と記号の結合の仕方（即ち構文論）を表わすために用いられる特別な記号は言語によって異なるけれども結合の仕方それ自身は共通であると言った方がいいかも知れない⁴⁵⁾、という論理学者たちの言葉はこの間のことを明瞭に語るものである。

Chomsky は言語が経験から単なる抽象によって得られるものではなく、言語を習得する子供は自分が“学んだ”ことよりはるかに多くのことを知っている。文法についての彼の知識は示されたはじめのデータをはるかに越えているのであり、決してこれらのデータからの“帰納的一般化 (inductive generalization)”ではない⁴⁶⁾、と言ったり、何かしつかりした構造を生まれたときから知っていて、その上で非常にわずかな未知の部分を経験からきめていけば、それで言語の構造がわかると思えざるを得ない⁴⁷⁾、と言って Descartes の生得的な合理性をとりあげたときの彼の意図はここに至ってはじめて正確な意味をもって理解されるものと考えられる。

むろん経験論か合理論かという議論についても簡単に問題にすることは、少なくとも言語習得に関する限り、危険なのであって、詳しくのべるのはさけるが一般論としては、経験論において

は合論論におけるよりも起源の問題が一層重視されており……対象認識の本性的見方においては一致している⁴⁸⁾、ことも否定出来ない。(これに関しては別稿、一経験論者、ジョン・ロックの言語観、を参照されたい)。

17. L. Bruhl は未開人の文化や言語の研究をして著わしたその、未開社会の思惟⁵¹⁾、の中で、未開人の文化について、それがいかに欧州人と違うかを例示し、かつ文化と言語との深いつながりについてのべている。つまり Sapir-Whorf に近い考え方をしているが、彼はこの一連のものが欧州人の論理に比較してみると、非論理というよりはむしろ論理の段階に達していないという意味で、前論理的だと言っている。然しながら今まで見て来たところからも明らかである様にこの見方は表われた表面的な現象のみに注目し、その過程の論理性を看過し、いわんや欧州人の論理を押しつけたという点で致命的な欠点を論理学者から指摘されることになったのである。特に沢田は L. Bruhl の名をあげ、この様な見方はヨーロッパの言語、文化を中心として未開人を位置づけようとする無意識の独善にわざわざされた非科学的な見方と言わねばならぬ⁵²⁾、と厳しくその非をついている。われわれが注目すべき概念化、抽象化に見られる普遍的なものとしての合理性は何も形にあらわれた表面的なものについてではなく、あくまで表面に出るまでの能力の働く過程に関するものだった筈なのである。一国語を既に習得したものが、同様に他国語を学習出来るということに見られる能力をとりあげて説明したのは、表面に出て来た違いなどについて言ってるのではなく、言語行為としてあらわれるまでの働きの共通性だったのである。AをAとして非Aと区別しAと認識する様な能力についてだったのである。

18. Chomsky の文法理論は、文法的な文が出来上る過程に関するものであり、この点に関しては我々が今までのべて来たところと一致する面が多い。少なくとも彼の与える理論は極めて抽象的なものであり、又論理的なものであることは知る通りである。彼自身、生成文法は計算機を使おうとする試みから生まれたものである⁵³⁾、と言う様に翻訳機には彼の言語理論は非常に利用度の高いものであるとされている。数学的な用語ばかりではなく、その抽象性と論理性に於いて実に数学的な性格をもっている。しかし関連して注意すべきは機械に於いてはあくまで与えられた資料に限られたいわば finite state grammar なのであり、且つ屢々のべて来た論理性について一致するだけの限られた P. S. grammar⁵⁴⁾、なのであり、創造にとって最も重要だった主体性(従って今のところ創造性)もないことは人間の言語とはっきり区別しなければならない性質のものだということである。

19. いずれにしても、その定義づけはどうかあれ、この能力というものは屢々のべて来た様に極めて普遍的なしかも論理性をもっていることは知られる。Descartes はその能力こそ機械にも動物にもない人間本来のものであるというわけであるが、これが実に心理学で言うところの readiness, preparedness に他ならない。人間の言語の起源についてはいろいろな説があげられるわけであるが⁴⁹⁾、それらはいずれも外的な要件から説明したものであって、当の人間に能力が備っていないければ問題にならない。根本的な人間のもつ readiness, preparedness、即ち人間の側の能力の‘用意が出来てる状態’こそ人間の言語を特徴づける筈のものであったのである。Lenneberg が、人間にはすべて、自動的に言語へと発展していくような型の行動に対する内的な性質を与えられている。……この性質は非常に深いものであるから、言語的な行動は末梢神経、中枢神経系がおかされている場合でさえ発展していくものである。……これこそ人間の言葉に対する preparedness、言葉の現象に対する普遍性への preparedness の程度を示す以外の何物でもない⁵⁰⁾、という言葉などは Descartes の言うところと一致することにむしろ驚かされるが、この能力に関

する限り一層、人間に本源的なものであるという性格を明らかにすることが出来たと思う。

20. 主体性と結びついて創造力となるこの能力の性格を心理的、論理的な面から明らかにして来たが、本来生得的とされているこの生得的ということをもっと深く探って後づけることも出来る。結論的には、Lenneberg が言う様に、極めて複雑なしかも同時的に行なわれる区別や統合は条件反射によって習得されるものであるよりむしろ、胚 (embryo) における生物学的な発展を思いおこさせる (reminiscent) ものである⁵⁵⁾、ということになるであろう。即ちこの一連の能力は実は、人間の能力と言われる前に既に胚の頃から備えもっているものであると言うわけである。その能力が他の動物と違う発達の仕方をしたというところに人間の能力として区別される意味があるのである。しかし生物に本源的なものから発して点については違いないのであって最近特に発達の著しいオートマンの理論でも、脳の働きの解明と関連して問題にされる。オートマンの理論と言うのは、一般に機械、生物体、社会機構であるにかかわらず、他から資料としての情報を受けとって自動的に処理し、その結果を自らの働きに反映させていく機構についての理論なわけであるが、これを適用すると、言語作用を含むような複雑な思考を行なっているときは、大脳における既成のオートマン閉回路に実際にパルスが流れてそこで学習が行なわれていき、その結果次第に新しい回路が出来ていくという。又われわれは、先天的に完成した多くの閉回路をもって生まれて来ているのであって、これが普通本能とか無条件反射とよばれるものにあたり、この生来の回路から順次に学習を重ねることによって、新しい回路を次々に完成し、賦活していく、これが‘経験’だと言うわけである。更に、われわれの言語使用および、それを伴うような思考は明らかに後天的能力に属する。つまりそれは経験によって獲得された能力である。しかしそれは完全な“無”から出発するわけではない。それは先天的に与えられた能力から出発し、それに新しい回路を順次に付け加えていくという仕方得られるのである⁵⁶⁾、とする。即ち生得的とされる能力は 実は胚の頃の極めて本源的なものを基礎にして発展して来たものなのである。

言語習得ということが生得的な能力であり それなりに論理性をもっているものであることを心理学、論理学の立場から明らかにして来たつもりであるが、この能力は、又今触れた様な極めて時限の低い段階でも成立するものでありどんなに知能が低くても生得的・普遍的に言語能力をもっている理由はこれでも明らかになる。特に後半の、先天的に与えられた能力から出発し、それに新しい回路を順次に付け加えていく、という言葉などは、16. であげた Chomsky の言うところとは同等のものであり、表現の違いだけであると言っても決して間違いではない。Chomsky において、神秘とされていた創造力のもとたる生得的な言語能力とその働きはここに至ってはじめて本質的に解明されたと言えまいか。

21. さてこのオートマンの理論において、一度出た結果を再び一つの情報として返すことをフィードバックと言うが、現実にはこの運動は、全体としての平衡を求めるときの‘揺れ’ oscillation として把握される。素朴な例をとりあげても、平衡を取りもどす運動、問題解決 (そして広い意味での創造) は決して一直線に可能な最良の方向に向うわけではないことは知ることが出来る。そこには常にいくばくかの‘揺れ’が認められる。この‘揺れ’の過程こそ弁証法によってとらえられようとしたものであると見、ヘーゲルが観念論によってとらえようとしているところのものは……フィードバックのある行動機能とよく似ている、とし、絶対精神というそれ自身のフィードバック系を有する人間精神の比喩的な全体は内的原因によるにせよ常に一つの方向と逆の方向との極限の間を揺れながら その間に与えられた情報によって自己を充たし自己の平衡を維持していく⁵⁷⁾、というときこれは又別の面からオートマン理論における思考と言語の性格を明ら

かにしたものである。思考はよく内的対話であると言われるが、この対話 (dialogue) はその語源において弁証法 (dialectic) とおなじ *diá + légein* であるということもまんざら関係のないことでもあるまい。又全く純哲学的理論的な方面から見ても、矛盾は古い形態のうちに成熟し新しい内容を基礎として新しい内容にふさしわく形態を創造することによって克服される⁵⁸⁾、という言葉なども弁証法と創造を関連的にのべたものと受けとってよい。

もしフィードバックの自動制御の作用を、人間、機械、社会機構にかかわらず、共通に「制御と通信」という点でサイバネティクスという統一科学⁵⁹⁾、とするのであれば、当然人間が生命維持(これも一つの平衡状態)のために様々な情報を集めそれを処理していかなければいけないことを考えても、人間の行動もその例外ではあり得ない⁶⁰⁾。むしろその一行動としての言語活動についても言えることは今まで述べたことでも明らかなことである。

22. 結論。以上ながきにわたって、様々な点から創造性について探り、それを、資料としての情報を分析、総合、推理によって平衡回復、或いは問題解決へ至ろうとする主体的な働き(言語活動に於いては、文法的を文を発し、自分の意図することを解らせる働き)と解すべきであること、次いでその基礎になる言語能力とその生得的、論理的な性格について明らかにし、更にサイバネティクスなど統一科学的な立場からも対象になり得る正当性をのべた。元来、言語学に関しては心理的な面と論理的な面は対立するものとして把えられ、その一致点を見出すことが難しいとされている。とかく心理的な説明が科学的な厳しさが欠けるということは一様に認めることであつた。しかし以上様々な面から指摘された様にこれは表面に出て来た形に対して言われることであつて、そこに至るときの人間の生来的な共通の能力の働き方、その過程の規則性 (general principles governing the operation of the mechanism which underlie language) は極めて抽象的ではあるが論理的な性質のものであることは見て来た通りである。問題は多く、文がつくられる過程の規則性と表面に表われた形の規則性ととの混同から起こる様に思われる。この過程の規則性こそ、概念構成に見られ、又 Descartes が、人間は言葉を arranger して……と言うときのその arranger の中に見られる筈のものである。従つて言語理論に本当の universal なものがあるとすれば、それは既に形としてあらわれた言葉についてのものではなくて、まさに人間共通の un instrument universel としての能力の働き方に関するものである筈で、これがあつてはじめて、単なる表面に出た形からの統計的な共通点の集積としてではない *grammaire générale* が成立し得よう。ここにこそ、Postal の言う、言語理論に最低必要なものとしての *mechanical procedure* (algorithm)⁶¹⁾、も成りたつ筈である。Chomsky が、Grammar is an account of competence. と云つた時の account とは抽象的に言語能力の説明をすることではなくて、その能力の働く過程の規則性を明らかにすることでなければならない。これは当然認識力に関わるから、非常に心理学的な性格をもつもので、ethnolinguistic であるよりは psycholinguistic なものである。もともと発話は表面に出た氷山の一角であり、そこに普遍性を見いだすことが困難であるとしても見えない12分の11にこそ一般原理が見出されるべき⁶²⁾、であり、しかも現象の下より深いレベルに潜む普遍的な原理があり、それが人間の行動を規制している⁶³⁾、とすれば言語を人間行動の一部としてとらえることの正しさはここにおいて証明されよう。かくして、ようやく我々は普遍性をもつ生得的な能力、論理性、加えて主体性、創造性、思考、言語を人間行動全体の中で位置づけることが出来た。

言語の普遍的なものを探すことと、全体 (the universe) の中における人間の言語の位置を発見することとの間には明確な違いを認めることは難しい⁶⁴⁾、という。人間行動を支配する性別は

同時にその一部である言語をも支配している筈のものであろう。人間から切り離されたものとしてではなく、真に人間の学としての、又普遍的なものとしての言語理論は、生得的な言語能力の働き方、その規則性に求められるべきものであり、そこにはじめて主体性と論理性に基づく創造的な（もしこれが必要な条件であるとすれば）理論がたてられるのではなからうか。この様に言語の理論を情報と制御によって均衡回復する一行動と見、オートマン理論として人間の行動の一部として位置づけ説明を試みることはおそらく大きな過ちではあるまい。既に見て来たように、様々な情報をもとに、それを処理しながら精神的均衡を取りもどそうとする行動が思考であり、言語行為であり、又この連続が他の動物から区別される創造的な人間としての唯一の生存の仕方であろうから、

文 献

- 1) *Teaching and Learning English as a Foreign Language.*
- 2) *New Directions in the Study of Language* (M. I. T. 1964) p. 100
- 3) *Language and Thought* (Prentice-Hall.) p. 23
- 4) *The Philosophy of Language.* (Harper & Row. 1966) p. 118
- 5) *ibid.* p. 119
- 6) A Transformational Approach to Syntax. *The Structure of English.* (Prentice-Hall. 1964) p. 234
cf. 朝日ジャーナル, 1966. 9. 25日号
- 7) Current Issues in Linguistic Theories. *The St. of Eng.* (op. cit.) p. 105
- 8) Co-occurrence and Transformation in Linguistic Structure. *The St. of Eng.* (op. cit.) p. 181
cf. *Cartesian Linguistics.* (Harper & Row. 1966) p. 22
- 9) *Topics in the Theory of Generative Grammar.* (Mouton. 1966) p. 10
cf. It cannot be too strongly emphasized that grammar is a description of part of what people know, not of what they do.
English Transformational Grammar. Jacobs; Rosenbaum. (Blaisdell. 1968) p. 272
- 10) Librairie Hachette. pp. 109, 110
- 11) *Cartesian Linguistics.* (op. cit.) p. 33
- 12) Current Issues. (op. cit.) p. 51
- 13) 言語学原論, 小林訳 (岩波, S. 17) p. 137
- 14) *Aspects of the Theory of Syntax.* (M. I. T. 1965)
- 15) フンボルト, 泉井 (弘文堂, S. 23) pp. 227, 277
- 16) 人間と言語, 岡田訳 (創元社, S. 20) p. 40
- 17) *ibid.* p. 84
- 18) *Wilhelm von Humboldt's Conception of Linguistic Relativity.* (Mouton)
cf. the Humboldt-Sapir-Whorf hypothesis, Nouns and Noun Phrases. E. Bach. *Universals in Linguistic Theory.* ed. E. Bach, R. T. Harms. (Holt. 1968) p. 122
- 19) *Cartesian Linguistics.* (op. cit.) p. 21
- 20) *ibid.*
- 21) 言語の構造, 泉井 (紀伊国屋, 1967) p. 132
- 22) コトバと哲学, 山元, 講座, 哲学, 言語 (岩波, S. 43) p. 33
- 23) *Cartesian Linguistics.* (op. cit.) p. 96. note.
- 24) On the Notion "Rule of Grammar." *The St. of Eng.* (op. cit.) p. 136
- 25) 現代哲学入門, 岩崎他 (有精堂, 1968) p. 199
- 26) 論理学と科学方法論, 中村 (有斐堂, S. 35) p. 294
- 27) *Structural Linguistics and Human Communication.* B. Malmberg. (Springer. 1967) p. 27
- 28) 言語学原論 (op. cit.) p. 159
- 29) ピアジェによる論理的思考の構造 (明治書院, 1967) p. 12
- 30) 現代の心理学, 今田 (岩波, 1965) p. 267
- 31) ルビンシュティン, 思考心理学, 石田訳 (明治図書, 1966) p. 26
- 32) 思考心理学II, 矢田部 (培風館, S. 42) p. 315
- 33) *A Sociology of Language.* J. O. Hertzler. (Random House) p. 27

言語に於ける創造性

- 34) *Semantics and Communication*. Condon. (Macmillan) p. 71
- 35) *Thought and Language*. L. S. Vigotzky. (tr. by E. Hanfman.)(M. I. T. 1965) p. 78
- 36) *Cartesian Linguistics*. (op. cit.) p. 64
cf. Language Universals and Anthropology. J. B. Casagrande. *Universals of Language*. Greenberg. ed. (M. I. T. 1966) p. 281
- 37) 現代思考心理学, 科学的思考 (明治書院, S. 42) p. 86
- 38) 心理学(下)今田訳 (岩波, S. 42) p. 147
- 39) 現代思考心理学 (op. cit.) p. 87
- 40) *Aspects*. (op. cit.) p. 56
- 41) cf. *Structural Linguistics and Human Communication*. (op. cit.) p. 25
脳——行動のメカニズム, 千葉 (N. H. K. 出版局, S. 43) pp. 138, 139
- 42) 現代論理学入門, 沢田 (岩波, 1966) p. 41
cf. *The Philosophy of Language*. (op. cit.) p. 44
- 43) 現代哲学入門 (op. cit.) p. 205
cf. Language Universals and Anthropology. (op. cit.) p. 294
- 44) 言語, 論理, 計算機, 坂本, 講座, 哲学, 論理 (岩波, S. 43) p. 172
- 45) 現代論理学入門 (op. cit.) p. 51
- 46) *Aspects*. (op. cit.) p. 33
- 47) 朝日ジャーナル, 1966, 9, 25日号
- 48) 認識論, 高橋 (岩波, S. 23) pp. 58, 59
- 49) *Language; its nature, development and origin*. O. Jespersen. (George A. 1954). pp. 413-416
- 50) The Capacity for Language Acquisition. E. H. Lenneberg. *The St. of Eng.* (op. cit.) pp. 589, 590
- 51) (上, 下) 山田訳 (岩波, S. 41)
- 52) 現代論理学入門 (op. cit.) p. 25
cf. コンドラートフ, 音と記号, 島原訳 (丸善, S. 42) pp. 67~69
- 53) Current Issues. (op. cit.) p. 61
- 54) *Constituent Structure*. P. Postal (Blomington. 1967) p. 72
- 55) *New Directions*. (op. cit.) p. 161
- 56) 言語, 論理, 計算機, 坂本 (op. cit.) pp. 172, 173
- 57) 現代における哲学と論理, 沢田編 (岩波, S. 40) pp. 139, 142
- 58) 弁証法とはどういうものか, 松村 (岩波, S. 26) p. 21
- 59) 哲学研究案内, 沢田他 (有斐閣, S. 39) p. 23
- 60) 生物と情報, N. H. K. 情報科学講座 (N. H. K. 出版局, S. 43) p. 170
- 61) *Constituent Structure*. (op. cit.) p. 3
- 62) Universals and Psycholinguistics. C. E. Osgood. *Univ. of Lang.* (op. cit.) p. 322
- 63) Language Universals and Anthropology. (op. cit.) p. 290
- 64) The Problem of Universals in Language. C. F. Hockett. *Univ. of Lang.* (op. cit.) p. 3